

2 歳児における人間関係を構築するあそびと環境

大岡 徹 洋 木 許 隆
安城市立二本木保育園 岐阜聖徳学園大学短期大学部

Play and the environment that builds human relationships in two-year-old children

Testuhiro OOKA, Takashi KIMOTO

キーワード：保育 あそび 人間関係 環境 保育の計画

I. はじめに

昨今、社会では、人間関係の希薄化を感じる。子どもが関わる家庭や地域において、自然に人間関係を構築することを学ぶ機会が減少しているのではないかと疑問を抱いている。子どもが自主性をもつことも大切であるが、「周りにいる子ども」というレベルから「友だち」といえる関係性を構築できた時、互いに成長することができるのではないかと考えた。そこで、本研究では、保育所に通う2歳児に焦点をあて、人とつながりをもつためのあそびを1年間取り組んできた。子どもが人間関係づくりを感じ、自己の大切さと互いに尊重し合う心を育んでいくことを願いたい。

本研究を進めるにあたり、木許ら(2018)は、「子どもの「リズムあそび」における保育者の関わり」において、4歳児を対象としたリズムあそびの展開がどのように身体の機能の発達に関わるものかを明らかにしている¹⁾。また、先行研究を調査すると、石川(2016)は、「0～5歳児における異年齢児との人間関係の発達の変化：0～2歳児との関わりに焦点を当てて」において、0～2歳児との交流に焦点を当て、子どもの言動やその関わりや関わる方法などの発達の变化を分析している²⁾。そして、原田(2018)は、「2歳児にみられる「人間関係」の考察：特に5領域「人間関係」で出された1歳以上3歳未満児の「自主性」「きまりの大切さ」を中心にして」において、保育所保育指針の変遷の中で「人間関係」の位置づけを考察し、2歳児の発達を概観した上で2歳児保育の重要性を考察している³⁾。しかし、本研究のように現職の保育者と保育者養成校の教員が、子どもの人間関係を構築するあそびとその環境構成について考察したものは希少であると思われる。

筆者たちは、保育所における勤務経験や、保育者養成校における勤務経験を通して、子どもが生き生きと活動する姿を目にしてきた。そして、本稿では、保育所に通う2歳児を対象とした人間関係を構築するあそびとその環境構成についての実践を報告したいと考えた。

II. 研究目的

保育所保育指針第2章「保育の内容」より2「1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」を参考に保育者があそびを設定し、保育の環境を整備することを行なう。そして、あそびから見える子どもの姿を保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照合し、子どもの人間関係を構築するあそびや環境が整備されているかを考察する。また、それらについての課題を明らかにすることを目的としている。

III. 研究方法

保育所Aにおいて2歳児22名を対象としたあそびの実践を行う。そして、子どものあそびの中で展開される人間関係の構築について保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照合し課題を見出す。

IV. 研究内容

まず、保育所 A において 2 歳児 22 名が展開するあそびを選択するにあたり、保育所保育指針第 2 章「保育の内容」より 2 「1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容」を参考にした。そして、2 歳児における人間関係を構築するあそびを選択したいと考えた。また、「イ人間関係」の「(ア) ねらい」にある「①保育所での生活を楽しみ、身近な人と関わる心地よさを感じる。」「②周囲の子ども等への興味や関心が高まり、関わりをもととする。」を取り上げ、「子どものごっこあそび」を展開することにした。

次に、保育の環境の整備を行い、保育室内に「ままごとコーナー」、「ブロックコーナー」、「制作コーナー」の三つのスペースを設置した。「ままごとコーナー」は、子どもが楽しみながら友だちや保育者と関わる中であそびを展開することを目的として設置している。「ブロックコーナー」は、友だちへの興味・関心をもち、きまりの大切さに気づくよう促す中であそびを展開することを目的として設置している。「制作コーナー」は、保育所の生活に慣れ、友だちや保育者、様々なものに関わる中であそびを展開することを目的として設置している。

このような環境の整備を行った上で 4 月から 5 月には、「ままごとごっこ」を展開した。子どものあそびの内容は、①子ども自身が興味をもった玩具を見つけ、手に取った玩具を保育者に紹介するなどしながら遊ぶ。②食べ物の形をした玩具を用いて、食べる真似をしたり、弁当を作ったりしながら保育者と遊ぶ。③子ども自身の思いや要求を表情や身振り、言葉で保育者に伝えようとする。というものである。そして、保育者の援助内容は、④あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう十分な数の玩具を用意する。⑤コーナーに間仕切りを用いてあそびのスペースを確保する。⑥確保されたあそびのスペースの中に、あそびの拠点になるような机や椅子を用意する。というものである。

これ以降のあそびは、「ままごとコーナー」を改修しながら行うものである。6 月から 9 月には、「アイスクリーム屋さんごっこ」を展開した。子どものあそびの内容は、④玩具をアイスクリームに見立て、食べるしぐさをしながら友だちや保育者と遊ぶ。⑤友だちと同じあそびをしようとする。⑥あそびの中で用いる言葉を知り、周りとのやり取りを楽しもうとする。⑦店員と客の役割を保育者とともに楽しもうとする。というものである。そして、保育者の援助内容は、④子どもが知っていると考えられるアイスクリームの玩具を手作りし用意する。⑥コーナーにお店を見立てた窓付きの間仕切りやメニューボードを用意する。⑦周りとのやりとりが成立するような言葉をかける。⑧あそび方を提案しながら子どもがあそびを楽しんでいると感じるような言葉をかける。というものである。

9 月から 11 月には、「お医者さんごっこ」を展開した。子どものあそびの内容は、⑧玩具を用いて友だちや保育者と遊ぶ。⑨医者や患者の役割を意識し、簡単な言葉のやり取りを楽しもうとする。⑩友だちの真似をして、役割ややり取りを再現しようとする。というものである。そして、保育者の援助内容は、⑥子どもが知っていると考えられる体温計、聴診器、注射器などの玩具を用意する。⑦コーナーに診察室や待合室を見立てた椅子を用意する。⑧あそび方を提案しながらその場の状況を理解できるよう助言する。というものである。

12 月から 2 月には、「おでん屋さんごっこ」を展開した。⑪友だちと同じ玩具を用いてイメージをふくらませて遊ぶ。⑫店員と客の役割を理解しながら楽しもうとする。⑬周りとのやり取りを楽しもうとする。というものである。そして、保育者の援助内容は、⑥子どもが知っていると考えられるおでんの具材や食器の玩具を手作りし用意する。⑦コーナーにお店を見立てた窓付きの間仕切りやメニューボードを用意する。⑩確保されたあそびのスペースの中に、あそびの拠点になるような机や椅子を用意する。⑭あそび方を提案しながら子どもがあそびを楽しんでいると感じるような言葉をかける。というものである。

四つの「子どものごっこあそび」をまとめると以下ようになる（表 1）。

表1 子どものごっこあそび

時期	あそびの名称	子どもの姿	援助と環境構成
4～5月	ままごとごっこ	①子ども自身が興味をもった玩具を見つけ、手に取った玩具を保育者に紹介するなどしながら遊ぶ。 ②食べ物の形をした玩具を用いて、食べる真似をしたり、弁当を作ったりしながら保育者と遊ぶ。 ③子ども自身の思いや要求を表情や身振り、言葉で保育者に伝えようとする。	④あそびに対する子ども一人ひとりの興味を引き出すよう十分な数の玩具を用意する。 ⑤コーナーに間仕切りを用いてあそびのスペースを確保する。 ⑥確保されたあそびのスペースの中に、あそびの拠点になるような机や椅子を用意する。
6～9月	アイスクリーム屋さんごっこ	④玩具をアイスクリームに見立て、食べるしぐさをしながら友だちや保育者と遊ぶ。 ⑤友だちと同じあそびをしようとする。 ⑥あそびの中で用いる言葉を知り、周りとのやり取りを楽しもうとする。 ⑦店員と客の役割を保育者とともに楽しもうとする。というものである。	④子どもが知っていると考えられるアイスクリームの玩具を手作りし用意する。 ⑤コーナーにお店を見立てた窓付きの間仕切りやメニューボードを用意する。 ⑥周りとのやりとりが成立するような言葉をかける。 ⑦あそび方を提案しながら子どもがあそびを楽しんでいると感じるような言葉をかける。
9～11月	お医者さんごっこ	⑧玩具を用いて友だちや保育者と遊ぶ。 ⑨医者や患者の役割を意識し、簡単な言葉のやり取りを楽しもうとする。 ⑩友だちの真似をして、役割ややり取りを再現しようとする。	⑥子どもが知っていると考えられる体温計、聴診器、注射器などの玩具を用意する。 ⑦コーナーに診察室や待合室を見立てた椅子を用意する。 ⑧あそび方を提案しながらその場の状況を理解できるよう助言する。
12～2月	おでん屋さんごっこ	⑪友だちと同じ玩具を用いてイメージをふくらませて遊ぶ。 ⑫店員と客の役割を理解しながら楽しもうとする。 ⑬周りとのやり取りを楽しもうとする。	⑥子どもが知っていると考えられるおでんの具材や食器の玩具を手作りし用意する。 ⑦コーナーにお店を見立てた窓付きの間仕切りやメニューボードを用意する。 ⑧確保されたあそびのスペースの中に、あそびの拠点になるような机や椅子を用意する。 ⑨あそび方を提案しながら子どもがあそびを楽しんでいると感じるような言葉をかける。

V. 研究結果

「ままごとごっこ」を展開した結果、①子ども自身が興味をもった玩具を見つけ、手に取った玩具を保育者に紹介するなどしながら遊ぶ観点において、子どもが興味をもった玩具を選択し見つけることができるようになった。そして、手に取った玩具を「みて」、「りんご」など言葉を用いて保育者に紹介できるようになった。②食べ物の形をした玩具を用いて、食べる真似をしたり、弁当を作ったりしながら保育者と遊ぶ観点において、保育者とともに食べる真似をしたり、箱に玩具を入れ弁当に見立てるあそびを楽しめるようになった。そして、保育所における生活やあそびにおいて保育者との関わりを求めることが多くなった。③子ども自身の思いや要求を表情や身振り、言葉で保育者に伝えようとする観点では、子どもの要求を満たすために「やって」などの言葉が発せられた。そして、言葉を用いず表情や身振りで保育者に伝えようとする姿も見られた。また、それぞれの子どもの思いが異なるため、保育者が子ども一人ひとりの思いを受け止める機会も必要となった。

「アイスクリーム屋さんごっこ」を展開した結果、④玩具をアイスクリームに見立て、食べるしぐさをしながら友だちや保育者と遊ぶ観点において、子どもは玩具をアイスクリーム見立て、保育者とともに食べる真似をした。そして、友だちと椅子に横並びで座り、食べる真似をしながら顔を見合わせて、「おいしいね」、「冷たいね」などの言葉を交わしていた。⑤友だちと同じあそびをしようとする観点において、友だちと同じ玩具をもつことや、友だちと同じあそびをすることを楽しんだ。⑥あそびの中で用いる言葉を知り、周りとのやり取りを楽しもうとする観点において、「いらっしやいませ」、「何がいますか」、「これください」などと保育者に言葉をかける姿が見られた。⑦店員と客の役割を保育者と

ともに楽しもうとする観点において、保育者と子どもの役割を理解し、言葉によるやりとりを楽しんでいた。

「お医者さんごっこ」を展開した結果、⑧玩具を用いて友だちや保育者と遊ぶ観点において、玩具の使用目的を理解し、その玩具を用いて友だちや保育者と遊ぶ姿が見られた。⑨医者や患者の役割を意識し、簡単な言葉のやり取りを楽しもうとする観点において、聴診器を身につけている子どもが医者役であるという役割を理解しやり取りを楽しんでいた。そして、ぬいぐるみを患者に見立て自ら保護者役になる子どもがいた。また、「先生、注射しますね」などの言葉を用いて、医者役のみならず看護師役を真似する子どももいた。⑩友だちの真似をして、役割ややり取りを再現しようとする観点において、周りの子どもたちが遊んでいる姿を見て、自らあそびに加わり同じやりとりを再現することを楽しんでいた。ここで、「友だち」は、日頃からともに活動する子どもの関係性を指している。また、「周りの子どもたち」は、日頃はともに活動していないが同じクラスの中にいる子どもを指している。

「おでん屋さんごっこ」を展開した結果、⑪友だちと同じ玩具を用いてイメージをふくらませて遊ぶ観点において、友だちと同じ玩具を用いて、おでんを盛りつけたり食べたりする模倣あそびへ発展した。⑫店員と客の役割を理解しながら楽しもうとする観点において、店員と客の役割を理解しながら楽しんでいた。そして、「いらっしゃいませ、何にしますか。」、「これとたまごください。」、「はい、分かりました。」などのやり取りを楽しんでいた。ここで、「これとたまご」のように、子ども自身が理解して用いることのできる言葉と、指示語でなければ名称を伝えることのできない言葉が存在した。⑬周りとのやり取りを楽しもうとする観点において、友だちと一緒に食べる真似をしながら、やり取りを楽しむ姿が見られた。そして、集団の中からおでんを買いに行くや何かを取ってくるという個の活動へと発展した。また、あそびの輪の中に入れなかった子どもが、保育者の誘いによって遊べるようになった。さらに、興味・関心をもっているがあそびに入れなかった子どもも、保育者の言葉がけによってあそびの輪の中へ入れるようになった。

これまでの四つのあそびを展開する中で、10月ごろには、「バスごっこ」が子どものあそびから出てきた。これは、子どもが椅子に縦並びで座りバスと見立てたあそびである。そして、保育者が音楽を流したり、手作りのハンドルを用意したりすることによって、バスに乗っている姿を子ども同士が共有していた。また、1月ごろには、「洗濯ごっこ」が子どものあそびから出てきた。これは、子どもが複数のハンカチを壁にかけたところに、保育者が「洗濯物みたいだね」という言葉がけをしたことによって始まったあそびである。そして、保育者が洗濯ばさみや洗濯機、物干し紐を用意することによって、洗う、干す、取り込む、たたむという洗濯のプロセスを理解する姿が見られた。さらに、「雨が降ってきた」という言葉が出るようになり、友だちと洗濯物を取り込む真似をするようになり、「風が吹いてきた」、「いっぱい洗濯ばさみつけなきゃね」という会話が成立し、友だちと協力して何かに向かおうとしたりする姿が見られた。

VI. 考察

研究結果から、保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に照合し考察する。

「ままごとごっこ」の結果から、①子ども自身が興味をもった玩具を見つけることができるようになった場面では、自ら新しい考えを生み出す喜びを味わうことになるため「思考力の芽生え」とであると捉えた。そして、手に取った玩具を保育者に紹介する場面では、保育者と心を通わせることになるため「言葉による伝え合い」とであると捉えた。②食べる真似や玩具を見立てるあそびを行う場面では、感じたことや考えたことを自分なりに表現しているため「豊かな感性と表現」とであると捉えた。そして、子どもの生活やあそびにおいて保育者との関わりを求める場面では、自分のやりたいことに向かっているため「健康な心と体」とであると捉えた。③子どもの要求を満たすため言葉が発せられた場面では、自分のやりたいことに向かっているため「健康な心と体」とであると捉えると同時に、考えたことを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」とであると捉えた。そして、それぞれの子どもの思いが異なる場面では、

子どもが主体的に関わり活動を楽しんでいるため「自立心」であると捉えた。

「アイスクリーム屋さんごっこ」の結果から、④子どもは玩具を見立て、保育者とともに真似をする場面では、感じたことや考えたことを自分なりに表現しているため「豊かな感性と表現」であると捉えた。そして、友だちと真似をしながら顔を見合わせ、言葉を交わす場面では、互いの思いや考えを共有しているため「協同性」と捉えると同時に、友だちの気持ちに共感しているため「道徳性・規範意識の芽生え」であると捉えた。⑤友だちと同じ玩具を持ち、同じあそびをする場面では、子どもが主体的に関わり活動を楽しんでいるため「自立心」であると捉えた。⑥あそびの中で保育者に言葉をかける場面では、考えたことを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。⑦保育者と子どもの役割を理解し、言葉によるやりとりを楽しむ場面では、感じたことや考えたことを自分なりに表現しているため「豊かな感性と表現」であると捉えると同時に、考えたことを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。

「お医者さんごっこ」の結果から、⑧玩具の使用目的を理解し友だちや保育者と遊ぶ姿が見られる場面では、共通の目的に向けて活動しているため「協同性」であると捉えた。⑨子どもが役割を理解しやり取りを楽しんでいる場面では、互いの思いや考えなどを共有しているため「協同性」であると捉えた。そして、見立てから役割を理解し真似している場面では、保育現場以外の環境に関わる中で、必要とされる情報を取り入れているため「社会生活との関わり」であると捉えた。⑩周りの子どもが遊ぶ姿を見て、自らあそびに加わりやりとりを再現する場面では、多様な関わりを楽しもうとしているため「思考力の芽生え」であると捉えた。

「おでん屋さんごっこ」の結果から、⑪友だちと同じ玩具を用いて模倣あそびへ発展する場面では、友だちと共通の目的の実現に向けて工夫しているため「協同性」であると捉えた。⑫子ども同士の役割を理解しながら楽しんでいる場面では、相手の立場に立って行動するようになっているため「道徳性・規範意識の芽生え」であると捉えた。そして、決まった言葉のやり取りを楽しんでいる場面では、経験したことを言葉で伝えているため「言葉による伝え合い」であると捉えた。また、子ども自身が理解して用いる言葉と、指示語が存在する場面では、自ら必要感に基づき言葉を活用しているため「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」であると捉えた。⑬友だちと真似をしながら、やり取りを楽しむ姿が見られる場面では、互いの思いを共有しているため「協同性」であると捉えると同時に、やり取りの仕組みを感じ取り友だちの様々な考えに触れているため「思考力の芽生え」であると捉えた。そして、集団の中から個の活動へと発展する場面では、自分の力で行うために考えたり工夫したりしているため「自立心」であると捉えた。また、あそびの輪の中へ入れなかった子どもが、保育者が誘いによって遊べるようになる場面では、自分のやりたいことに向かって心を働かせているため「健康な心と体」であると捉えた。

これまでの四つのあそびを展開する中で、「バスごっこ」や「洗濯ごっこ」が子どものあそびの中から生まれている。これは、充実感をもって自分のやりたいことに向かう姿として「健康な体と心」、環境に主体的に関わる姿として「自立心」、共通の目的の実現に向かい工夫する姿として「協同性」、あそびに必要な情報を取り入れ、情報を活用しながら活動する姿として「社会生活との関わり」、新しい考えを生み出す喜びを味わう姿から「思考力の芽生え」、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友だちと表現する喜びを味わったりする姿から「豊かな感性と表現」が育まれていると考えられる。また、「洗濯ごっこ」においては、自然の変化を感じ取り、身近な事象への関心が高まっているため「自然との関わり・生命尊重」であると捉えられる。

2歳児の人間関係を構築するあそびを想定して、環境の構成を行ってきたが、保育者が期待している以上の結果を子どもが導き出しているのではないかと感じている。

Ⅶ. まとめと課題

四つの「子どものごっこあそび」を保育所保育指針第1章「総則」4「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」(2)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目に照合したが、「ままごとあそ

び」では、10項目中4項目に該当することがわかっている。そして、「アイスクリーム屋さんごっこ」では、10項目中5項目について該当することがわかっている。それぞれのあそびは、「言葉による伝え合い」及び「豊かな感性と表現」の項目について共通性があると言える。また、あそびを展開する時期を追って、子どもが人間関係を構築していく姿が見られるようになった。

「お医者さんごっこ」では、これまでのあそびの中には無かった「社会生活との関わり」の項目に該当することから、保育所内外の様々な環境に関わる経験を重ねていると言える。また、10項目中3項目について該当することがわかっている。そして、「おでん屋さんごっこ」では、10項目中7項目について該当することがわかっている。それぞれのあそびは、「協同性」及び「思考力の芽生え」の項目について共通性があると言える。さらに、あそびを展開する時期を追って、総合的に子どもの資質や能力が育まれているのではないかと考えている。

本研究では、2歳児を対象として四つのあそびを展開したが、その中で「自然との関わり・生命尊重」の項目のみ確認することができなかった。しかし、子どものあそびの中から出てきた「洗濯ごっこ」では、その項目を確認することができている。これらのことから、年間を通して行った「子どものごっこあそび」の中には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目が全て網羅されていると考えられる。

今後、2歳児を対象としたあそびの内容が、子どもの発達段階に相応しいものであるかという検証が必要である。そして、本研究で対象となった子どもが、3歳、4歳、5歳とあそびの経験を重ねる中で、どのような子どもに育っていくかを見守りたいと考えている。

注・文献

- 1) 木許隆他 (2017) : 「子どもの「リズムあそび」における保育者の関わり」, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要第17号, 159-164.
- 2) 石川洋子 (2016) : 「0～5歳児における異年齢児との人間関係の発達の变化: 0～2歳児との関わりに焦点を当てて」, 文教大学教育学部紀要第50号, 1-9.
- 3) 原田明美 (2018) : 「2歳児にみられる「人間関係」の考察: 特に5領域「人間関係」で出された1歳以上3歳未満児の「自主性」「きまりの大切さ」を中心にして」, 名古屋短期大学研究紀要第56号, 81-95.

参考文献

- 1) 厚生労働省告示第117号「保育所保育指針〈平成29年告示〉」(初版), フレーベル館, 東京
- 2) テルマハムス他著, 埋橋玲子訳 (2004) : 「保育環境評価スケール①幼児版」(初版), 法律文化社, 京都.
- 3) 神長美津子他著 (2017) : 「3・4・5歳児のごっこ遊び」(第4版), ひかりのくに, 大阪.